

「考えさせる教育」について考察するための覚書 ー 行為とコミュニケーションの視点から ー

藤本一男

作新学院大学

人間文化学部 教授

E-mail:fujimoto@sakushin-u.ac.jp

考えるということは、行為の中断によって生じる。生命体としての行為の継続のために必要なのが「思考」を通じた反応である。この中断状況は危機と呼ばれる。危機は、自然環境から訪れるものもあれば、社会的関係からもたらされるものもある。社会的関係においては、暴力が究極的な社会統制の手段である。しかし、他方、私たちの社会は、暴力を封印し、行為の中断を引き起こす可能性のある要素を排除し続けている。これは、より安全で安心な社会をめざしてきた努力の結果である。

実は、このことが危機にリアルに対面する能力を形成することから私たちを遠ざけてしまっている。私たちの社会（若者に限定することはない）が「考えること」から遠ざかっているとしたら、そこにはこのような社会的な「進化」が背景にある。しかし、危機が後景化した社会が、危機への対応力を形成できないとすれば、その社会は、非常に脆弱なものになる。そこに教育の意義があり、生身の教師の存在と場の重要性がある。

Memorandum to consider Education to make it think From the aspect of the social actions and communications

Kazuo Fujimoto

Professor, Faculty of Human and Culture Science

E-mail:fujimoto@sakushin-u.ac.jp

It is caused to think by the interruption of the act. Needing it to continue the act as a life is a reaction through "Idea". This interruption situation is the one that is called a crisis. The crisis has the one visited from natural environment, and has the brought one from the social relationship. An ultimate and body violence is moved, and the jeer and contempt, etc. function as a management means in an intimate relation there. However, our society keeps sealing violence, and, on the other hand, excluding the element with the possibility of causing the interruption of the act. This is a result of the effort to have aimed at a safer, safer society.

To tell the truth, we are kept away from the formation of the ability that this meets the crisis in the round. Such social "Evolution" is in the background there if our society (Do not limit it to the young person) is going away from "Think". However, if the society that made the crisis post- cannot form the correspondence power to the crisis, the society becomes very weak. There is a problem of the education there. The above-mentioned point is considered from a social act and communications.

1 はじめに

「若い情報システム技術者に対して、自分で考える力が弱いという指摘がされて」おり、それへの対応を議論する場に問題提起者として発言させていただくことになった。私自身の実践のご紹介は、当日の資料に譲るとして、ここでは、「考える」ということ、そして、今回のテーマである「考えさせるされる」ということをめぐって私が前提としているいくつかの点をまとめておきたい。

1.1 二つのアプローチ

今、私達が、直面しているのは、若者層の困難であるが、それは、私たち（教師・上司）と彼らの二者関係で完結するものではない。そこには、若年層を育てた親世代や教師世代、また、その親世代や教師世代を育てた、そのまた親や教師世代が関係している。そのため、我々と学生達の間で可能な領域はほんの一領域にすぎないということである。この関係の重層性に、今日の若年層の困難な状況の非可逆性の根拠がある。

こうした困難な状況を以下のふたつの側面から考えていく。

- 行為からみる「考えること」
- コミュニケーションと態度/役割取得

2 教育の課題？

しかし、今回のテーマを見て改めて問題の深刻さを実感した。つまり、「考える」ではなく「考えさせる」ことが教育の課題になってしまっている。

これは、明治期以降のわが国での近代教育の到達点に対応しており、ひとり情報技術教育に限定される課題ではない、ということである。

2.1 情報、知識を伝授する場

かつては、学校の機能は、情報や知識を伝授する場であった。もちろん、その情報や知識をどう生かすかということもセットに教育が行われていたことはいまでもないが、それらは、学校の外に存在していた。実社会で役にたつかどうかを学校を評価する重要な基準であった。役に立つということは、なにも内容だけでなく、どの大学を出たかという側面が役に立つということも含めている。

しかし、そうした学校の外にあった価値基準が消失し、そうした学校にくる意味付与まで、学校が提供する内容として求められるようになっていく。

同様のことが職場にもいえる。社会にでて、働き、賃金を得て、自分の生活をささえる。つまり、生きていくために働く、という前提が、必ずしも自明に必要なものとされない状況がある。

もちろん、そうした労働なしでも生活ができるわけではないが、観念、価値基準としては後景化しているのが現代である。

2.2 救済策のジレンマ

こうした状況は、大学においても社会においても、構造的に弱者を生み出していく。そこで、救済策が必要になるが、その救済策は、困難に直面している者の「当面の」救済は行うものの、その困難を生みだしている社会構造、社会関係には手をふれないので、根本的な解決策にはならない¹。

3 行為から見た「考えること」

3.1 考えないことは「よくない」のか

考えるということは、行為の中断によって生じる。生命体としての行為の継続のために必要な「思考」を通じた反応である。この中断状況は危機と呼ばれるものでもある。危機は、自然環境から訪れるものもあれば、社会的関係からもたらされるものもある。社会的関係においては、暴力が究極的な社会統制の手段である。

私たちの知的活動が営まれている社会は、構成員である個人をさまざまな仕方で統制している。そこでは、究極的には身体的暴力が発動され、親密な関係においては嘲笑や侮蔑、なども統制手段として機能している。しかし、他方、私たちの社会は、暴力を封印し、行為の中断を引き起こす可能性のある要素を排除し続けている。これは、より安全で安心な社会をめざしてきた努力の結果である。

実は、このことが危機にリアルに対面する能力を形成することから私たちを遠ざけてしまっている。私たちの社会（若者に限定することはない）が「考えること」から遠ざかっているとしたら、そこにはこのような社会的な「進化」が背景にある。しかし、危機が後景化した社会が、危機への対応力を形成できないとすれば、その社会は、非常に脆弱なものになる。

そこに教育の今日的な重要性と課題がある。それを考えるためには、直面している困難の正体をあきらかにしなくてはならない。

冒頭に書いたように、学校の外部に学ぶ動機が存在していた時には、危機的状況への対応態度もそこを参照基準にできた。それは、教師にも共有しうるものであった。しかし、その価値基準すら学校内で形成するようになった今日、情報や知識の伝授という領域だけではなく、学ぶことの意味そのもの、学ぶ態度、という領域も教育の課題として考えなくてはならない²。

3.2 暴力

危機意識の有無が学習行為に影響することはいうまでもない。立身出世の道がひらかれるのか否か、安定した生活への保障が手に入るのか否か。かつては、こうした危機感が勉学の動因の大きなものであった。もちろん、10代後半の若者にとっては、これらの目標が提示する「立身出世」や「安定した生活」がいつの時代でも観念的なものでしかない³。

こうした目標たりうる理念が形骸化した背景には、理念の正体が明らかになったという側面に加えて、理念の相対化が現実のものとして進行したということがあげられる。これを推し進めているのがほかならぬ、データベースとインターネットである。

¹いわゆる「面倒見のよい教育」のジレンマ

²ここに道徳教育の復活や全寮制による全人的教育などが注目される条件があるのだろう。注目している領域としては同意するが、これは復古的な価値基準の復活で実現するものではない。復古的な価値基準がよりどころとする共同体な規範の解体が、困難の原因なのであるからだ。

³蛇足ながら付け加えれば、革命運動の理念も同様である。

加えて、私達は、安全安心な社会の実現を目指して、一度発生した危機は二度繰り返さないように、また、想定される危機は招来しないように、社会の仕組みをデザインし、実装している。これを支えているのは、現代社会の神経網となっている、社会化した情報システムである。

自然や社会にわたって、こうした危機管理のシステムが偏在化することによりかなりの領域で「安全・安心」が実現されている⁴。

それでも、自然や社会の不安定さを完全に除去することはできない。とくに、社会的な利害の対立は、いまだに戦争という暴力の発動を不可避のものとしてしている。

他方で、日常生活での暴力の発動は、一切抑制されている。

危機への対応力の形成を考える場合に、この点は、決定的に重要である。徴兵という制度がもつ教育的な機能もおそらく、そこに見出すことができる⁵。

4 コミュニケーションとしての教育

4.1 武道の稽古システムに学ぶ

多少唐突であるが、武道の稽古について考えてみたい。武道（武術でもいい）は、相手を倒すことを目的とする。究極的には相手を殺すために技を磨く。暴力が封印された今日⁶、こうした武道の側面は後継化し、スポーツの側面が表面にでていとはいえ、空手などは、素手で相手を殺すことを可能にする技を身につける。

問題は、そのトレーニング（稽古）の過程である。真剣勝負をその都度やっていると、技を身につける前に、命を落としてしまう。それはで、稽古にならない。つまり、武道の稽古のシステムは、命を掛けるという人間にとって究極の行為を、日常化するという仕組みをもっている。

試合のルールもそこに現れる。試合は、どのようなものであれ、相手を死亡させるという危険をはらんでいる。死亡までいかになくても相当な打撃を与える可能性はそこらじゅうにある。試合や稽古の場でなれば、傷害罪の対象になるようなことだけである。

しかし、だからといって、危険をすべて除去してしまった場合にどうなるか。寸止め空手に対する批判は、その点からなされる。相手に当てない＝寸止のルールは、安全に競技として空手を行うための知恵である。しかし、その知恵は、空手の技術の発展にとっては本質的なものを見失わせることになる。

寸止で形成される突きと蹴りの技と、実際に相手にあてて（それもキックミットではなく、肉と骨と血のつまった生身の人間に）形成される技は、まったく別のものである。突きや蹴りの本質である体重移動がまったく異なったものになる。

稽古や試合のシステムにあるルールは、こうしたことを踏まえて形成されてきた。

こうした知恵は、実際の戦闘（究極の危機）を招来させることなく、擬似的に（身体にとっての）危機的状况を形成し、それに対応する態度をつくる機能を有しているといえる。

こうしたことを、システム化されマニュアル化された危機管理社会のもとで危機意識（本稿では、これを「考える」という行為の源泉と位置づけている）の形成に参考したい。そこで重要な要素になってくるのは、あとで述べる予定であるが、生身の教師という存在であり、教室という空間である。その意味では、この要素が欠如した e-Learning は、シューティング・ゲームで武道家を養成できるというに等しい。

⁴かのように見えると限定したほうが正確なのだろうが、ここでは言い切る

⁵戦争には反対であるが、相手を殺すこと前提にした訓練（教育）の機能には注目していると思っっている。もちろんプラスもマイナスも含めて。

⁶これは、現代に特有な状況ではない。

4.2 教育現場の課題：非日常的状況の擬似的創出

「考えなくてもいい」状況を作り出してきたのは、他ならぬわれわれである。

他方、身体的な危機に直面した時に、なんらかの対応をするであろうことを前提にするならば⁷、危機的局面がもつ教育作用を考えることができる。

しかし、これは、われわれが目指す社会の方向ではない。そこで、検討したいのが、武道の稽古がもつ矛盾した二つの要素（危険と安全）を統一したシステムである。

5 まとめ

ここでは、それを担う生身の教師、身体がさらされる場が重要になる。情報や知識の非身体化、非場所化が進行すればするほど、思考の身体性を担保するこの二つの要素が重要になるだろう。

わたしの勤め先では、地域連携プログラムとしてキャップストーンコースというものを開講している。1、2年で学んだ基礎科目の知識を一度、地域社会の実際の問題に直面する過程で再構成させ、4年次の専門領域の選択に結びつけようというものである。地域は、学内ではないため、さまざま危険も存在する。問題によっては、地域を二分するようなものもある。そこにお勉強させてください、と入っていけないものではない。そうした緊張関係の中で、自分の知的営みを再構成させることで、知をあやるつ自分というものを発見してもらうのが目的である。ここでは、地域に対して教員は、自らの専門性に基づいた信頼を維持し、同時に、社会との関係における信頼を学生からも維持しなくてはならない。教員が変わっていく、というプログラムでもある。

A 情報処理と役割取得

A.1 人間の思考は「情報処理」か？

教育をコミュニケーションとして考えるということは、ごく普通の発想であると思う。しかし、コミュニケーションという語に含意されているものを少し考えてみたい。

わたし達がコミュニケーションを考えるとときに、無意識に思い浮かべるのは、シャノンの送り手-受け手図式であろう。この図式は、シャノン自身がその論文の中で、意味を捨象し、形式としての伝達を論じると限定しているにもかかわらず、意味の問題をどう扱うようにできるのかと、(おかしな)批判にもさらされてきた。

このコミュニケーションのシャノンモデルに対して、WJ オングは、「人間のコミュニケーションにそのようなモデルなどない。」と言い切り、人間はコミュニケーションをするにあたって、あらかじめ、その対象を自分の中に取り込んでいる。そのようなことは機械にはできない、という。この文言を工学的に理解すれば、それはフィードバックのループを形成すればいいということになるようだが、オングが前提にしているのは、そういうことではない。

オングは、社会心理学で前提とされる「役割取得」「態度取得」という概念があらわす他者を取り込む機能を問題にしている。これは、現在遂行されている相互行為にだけ着目すれば、絶えることのないフィードバックの連鎖=社会的相互行為、ということになるが、この相互行為の主体の初期値は、乳児がこの世に生まれ落とされてからの社会関係の総体を意味している。

こうした考察を踏まえて、オングは、シャノンモデル（文献では、メディアモデルと呼んでいる）は、書き言葉コミュニケーションを表現している、と述べ、人間のコミュニケーション（コミュニ

⁷これを前提にできないとわれわれは存続できない。

ケートしようとしている相手をあらかじめ自分の中に取り込んであるというコミュニケーションの逆説)は、声の機能に注目することで見えてくると述べている。

A.2 情報とは情報処理される対象である

分子生物学者の柴谷篤弘は、このシャノン論文の説明で面白いことを言っている⁸。

情報とは情報処理される対象である。

というのだ。ここでいう情報処理とは、シャノン論文に即していえば「通信」である。この通信という目的にそって情報が定義されている。処理される対象が、情報である。情報が情報処理の対象=客体であるならば、主体はどこにいるのか。それは、通信の行為者ということになるだろう。

この点をオングによる、コミュニケーションを「役割取得」として捕らえる見方と対比すると、対象化するコミュニケーションと相手と対称であるコミュニケーションという領域が見えてくる。対象化と対称性が、コミュニケーションを考察する場合に重要な概念になる。

B ヘレンとサリバン先生

人間の役割取得能力をを考えるためのいい素材に、ヘレンケラーの井戸のシーンがある。この場面は、映画「奇跡の人」⁹で有名である。7歳までシンボルの世界を手にする事なく育ってきたヘレンが、サリバン先生の教育によって、井戸の水と WATER という文字（指文字）に関係があることを体得し、世界は名前（シンボル）にあふれているという、世界のビッグバンを経験する場面である。

日本では、「奇跡の人」というと、三重苦でありながら、大学でも学び障害者福祉に大きな貢献をした人という側面からヘレンのことを指す解釈が一般化されているが、この戯曲で描かれているのは、サリバン先生の教師としての苦闘なのである。

そこにあるのは、知識の伝授ではない。そもそもシンボルの体系を内面化していないヘレンに、知識を伝授する方法はない。サリバンがやったのは、この知識を吸収する前提である価値のシステムをインストールすることであった。それは、サリバン自身が視覚障害者であること、また、幼少期に弟のジミーと孤児院で悲惨な生活を送っていた経験を有していたということを前提して、可能となったヘレンとのコミュニケーションである。

ここに、人間の役割取得能力（対称性の構築）のもつ重要な側面を見ることができる。それは、情報処理（対象化）の過程ではない。

C そつなつこなす社会

現代は、先人が直面した困難をあとのものたちが追体験しないで済むような配慮に満ちている。その成果はマニュアル化に現れている。マニュアル化という後は、機械的暗記とあわせて、マイナ

⁸柴谷 1987 では、シャノン自身の論理構成と述べていたが、柴谷 1999 では、W ウィーバーの解説論文の構成と訂正されている。しかし、情報についての「操作的定義」という説明は有効だろうと考えている。

⁹このタイトルは、戯曲の作者、Willam Gibson（サイバーパンク SF の嚆矢「ニューロマンサー」の作者と同名だが別人のはず）によってつけられている。原題は「The Miracle Worker」。奇跡の仕事をした人という意味では、主人公はヘレンではなくサリバン先生。つまり、サリバン先生物語。

スの意味を付与させて使われることが多い。しかし、第一義的には、プラスの機能を持っていることは確認したい。

その上で、マイナス面であるが、多くの対応がマニュアル化されている。例えば、ある古本チェーン店での挨拶がある。「いらっしゃいませ。こんにちは」という奇妙なフレーズを店員は、定期的に繰り返している。お客がきたら「いらっしゃいませ」と言え、という指導はこれまでどのような店舗でもされてきたであろう。その意味では、「きちんと」挨拶がされている。すると、あの奇妙な「いらっしゃいませ。こんにちは。」の違和感はどこからくるのか。

あの「いらっしゃいませ。こんにちは。」は、声として発せられているものの、わたしには届いくことなく、空虚に店内にこだましている。これなどは、マニュアル化された「挨拶」のいい事例であろう。

配属されるまえに、挨拶トレーニングをうけているのだろうか、全員が全員同じ調子で挨拶をする。あの中で「普通」の「いらっしゃいませ」を言うのは至難の業である。

不思議なのは、全員がそれにしがっていること。それをおかしいという声が社内からあがってきていないと思われること、である¹⁰。

参考文献

- [1] CE シャノン,W ウィーバー,1968(1948),『コミュニケーションの数学的理論-情報理論の基礎-』明治図書
- [2] 柴谷篤弘,1987,『<情報>を超えて』,河合文化教育研究所
- [3] 柴谷篤弘,1997,『構造主義生物学』東京大学出版
- [4] W.J オング,1991(1982),『声の文化と文字の文化と』藤原書店
- [5] G.H. ミード,1970(1934),『精神・自我・社会』青木書店
- [6] ヘレン・ケラー,2004(1903),『奇跡の人 ヘレンケラー自伝』新潮社
- [7] カッシーラー,1997(1944),人間 岩波書店
- [8] 南郷継正,1977,『武道とはなにかー武道綱要ー』,三一書房
- [9] 藤本一男,2001,「<研究会報告>インターネット技術に媒介された教室のインタラクショ
ン」,『社会情報』札幌学院大学 社会情報学部,139-147

¹⁰いきつけの薬局の店員さんが、最近「いらっしゃいませ。こんにちは。」というようになった。その時、彼は、手元の電卓で伝票の計算を続けていて、入店したわたしを見てない。そういう状況でも「挨拶」をできる便利なフレーズなのだ。